



カルパチア山脈ふもとのルーマニア正教寺院



ミッション・宣教の声 主幹
黒田 禎一郎

信仰の視線はどこに

“栄華を窮めたソロモンでさえ、
このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。”
マタイ6・29

しばらく前でしたが、私は北海道洞爺湖の大自然の中を散策していました。静かな湖畔を歩いていたとき、道端に咲いていた野草に目が止まりました。普段、ほとんど注目しない私ですが、たいへん驚きました。どの野草も精一杯、美しく咲いている姿が鮮明でした。神の創造の偉大さです。その時、私の心に冒頭のみことばが浮かび、思わずカメラシャッターを切りました。イエスは、あのシバの女王は賢者ソロモン王を訪ねましたが、栄華を窮めたソロモン王でさえ野の花ほどに着飾っていなかったと断言されました。何度も読み熟知している聖句です。そして、野の花もこれまで何度も見てきました。しかし、これほど感動を覚えたことはありませんでした。なぜでしょうか？それは、心静ませる中で初めて見えた奥義でした。それまで、私の視線はそこに向いていなかったことです。そこで、主は私の「**信仰の視線はどこに**」向いているか問われました。

マルコの福音書14章には、ひとりの女性が純粋で非常に高価なナルド油の入った石膏の壺を持ってきて、その壺を割り、イエスの頭に香油を注いだストーリーがあります。女性に対して2つの見方がありました。①憤慨した人たちは「何のた

めに、香油をこんなに無駄にしたのか。この香油なら、300デナリ(当時の年間収入額)以上に売れて、貧しい人たちに施しのできたのに。」と言いました。②もうひとつはイエスの視線は、「そのまましておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。わたしのために、りっぱなことをしてくれたのです。」という評価でした。ここで注目したいもう一つのことは、この女性の視線です。彼女はまるでイエスだけが見えているかのように、周囲を意識せず、高価な香油の入った壺を割り、イエスの頭に注ぎました。女性にとって、イエスが人生の目標であり、すべてでしたので、何をどんなにささげても足りませんでした。それが彼女の視線でした。イエスは彼女の美しい行いをほめ、福音が伝えられる所でどこでも語られると祝福されました。

女性の視線は正しいお方(イエス)に向けられていましたから、彼女は高く評価されました。野の花から「**信仰の視線はどこに**」向いているのかと、気づかされました。それは普段の生活ではない静思の内で与えられました。神の奥義を理解する鍵は、そこにあることを教えられました。

コロナ禍の海外邦人宣教 11

コロナ禍でのキリスト教会の展望

パリプロテスタント日本語キリスト教会 牧師
清水正夫

パリプロテスタント日本語キリスト教会は、1980年、2組の日本人クリスチャン夫妻が集まって礼拝をささげたことから始まりました。聖書のみことばを中心として教会が形作られ、現在はパリ市中心部バスターニユ広場の近くにあるプロテスタント教会の会堂で、毎週主日午後には礼拝をささげています。フランスはEU27ヶ国中面積が一番大きな国ですが、その中であってパリ教会は日本語で礼拝をささげている唯一の教会です。3年前の2018年にはフランス・プロテスタント連盟から加入が認められ、メンバー教会としての立場と交わりが与えられました。41年にわたりみことばによって教会を導き、教会を通して福音を宣教しておられる主イエスの御名を心から賛美します。



教会外観

ロックダウンと礼拝・集会

フランスでは昨年3月以来、全土で3回の厳しいロックダウンが行われました。ロックダウン中は教会もすべて閉鎖され、パリ教会も他の教会と同じようにZoomでオンライン礼拝をささげました。昨年春の第1波が収まり、制限が解除された昨年7月から10月までの4ヶ月間は、教会堂での礼拝と信徒宅の庭での集会を行うことができました。しかし、11月から2回目のロックダウンが行われ、パリ教会も再びオンライン礼拝のみとなりました。今年の春以降ワクチン接種が進んで感染者が減少し、6月にほとんどの制限が解除されたことに伴い、パリ教会も8ヶ月ぶりに、教会堂での礼拝と信徒宅の庭での集会を再開しました。現在も手消毒、1mの距離、マスク着用の3義務を守りつつ、礼拝と集会を行っています。

洗礼式

1回目のロックダウンは、マクロン大統領

領がテレビ演説で発表した3日後の昨年3月17日に始まりました。直後の3月22日主日に1人の方の洗礼式を予定していましたが、不可能となりました。その方は3月末で完全帰国の予定でしたので、急ぎよロックダウンの始まるその日に、その方の自宅で洗礼式を執り行うことにしました。牧師夫妻と1人の役員夫妻が自宅に集い、ほかの役員がオンラインで立ち会う中、午前11時に洗礼式が執り行われました。式後、役員兄妹による祝福の後、すみやかに解散し、私たちはロックダウンが始まる正午ちょうどに自宅に駆け込むことができました。また、昨年のイースターにはもう一人の方の洗礼式も予定されていました。この方はロックダウンで先が見えない中Zoomで学びを続け、昨年7月、再開した会堂での礼拝で、洗礼の恵みにあずかりました。この姉妹はコロナで新年度の学びをあきらめ、留学を中止して昨年8月に帰国し、日本の大学院に戻って学びを続けています。コロナ禍が始まったばかりの時期に2人の姉妹をこのように導き、教会を祝福くださった神に感謝と賛美をささげました。

オンライン礼拝

オンライン礼拝期間中の問題は、やはり交わりが薄くなることです。試行錯誤を重ね、1時間ほどのオンライン礼拝後に続いて、交わりの時間を持つようにしました。礼拝でのメッセージや祈禱課題を分かち合うこの交わりを主が祝福し、窮屈で不自由な生活の中、みことばと祈りによって教会の交わりを励ましてくださいました。またオンライン礼拝期間中、未信者の方が数名参加されました。その

方々にとっては、ネットの方が参加しやすかったようです。かつてパリ教会に集われた方やフランスの各地方に在住している方で所属教会の礼拝をした後にパリ教会のオンライン礼拝に参加する方も数名おられました。外出が制限される中、参加された方々も教会も、思いがけない交わりを喜びました。

ヨーロッパキリスト者の集い

第38回ヨーロッパキリスト者の集いが今年7月29日から8月1日まで、独仏国境の町ストラスブルで行われました。今回は初めての取り組みとして、準備と運営が4つの在欧日本語教会から送り出された実行委員によってなされました。フランスでは7月からデルタ変異株による第4波が始まり、開会が近づく中、ワクチン証明または72時間以内のPCR陰性証明を確認する義務が主催者に課せられ、急ぎよ実行委員会が対応されました。困難の中、実行委員会とコロナ対策委員の行き届いた対応により、90人の参加者全員が感染することなく、みことばと交わりに励まされ、祝福の内に終わりました。

コロナ禍の教会の課題

「コロナの時代、教会は予想できないことが起こることを予想しておく必要があります。その上で、ヘブル10:25が勧告するとおり、神に近づくこと、希望の告白に生きること、愛と善行を促し合うこと、そのために自分たちの集まりを続け、励まし合うことが大切です。」ある神学校の先生のことばです。みことばに従って歩み続けられるよう願っています。(つづく)



聖日礼拝



伝道、プレゼントにもおすすめです。

聖書の集い・連続メッセージ

「讚美歌詩・聖歌詩の背景から学ぶ信仰」

第1巻～第8巻 刊行

多くの人たちに親しまれている讚美歌詩・聖歌詩の背景にある作詞者の信仰に焦点をあてる励ましのメッセージ集です。

中綴じB6サイズ ¥500 (税別)

ご注文は「ミッション・宣教の声」事務局まで。



その時、わがたましいは歌う
主幹 黒田 禎一郎

海外伝道シリーズ 旧東ヨーロッパの 教会と信者は今

161

ウクライナ共和国
黒田 禎一郎

チェルノブイリ原発事故

1986年4月26日午前1時23分、旧ソ連の構成国ウクライナ・ソビエト社会主義共和国のチェルノブイリ原子力発電所4号炉で、大爆発事故が起きました。国際原子力事象評価尺度 (INES) は深刻な事故を示すレベル7を発表しました。放射性物質は風に乗って北半球全域に拡散しましたが、日本でも5月3日に雨水中から放射性物質が確認されました。

旧ソ連時代に起こったチェルノブイリ原発事故は、当初公表されず否定されていました。しかしスウェーデンのフォルスマルク原子力発電所の職員の靴から、高線量の放射性物質が検出されたことが発覚のきっかけとなりました。28日中にはスウェーデン政府の外交官がソ連政府と接触し、ソ連内で原子力事故が発生した事実がないか問い合わせましたが、当初ソ連政府はその可能性を否定する回答をしていました、しかし、その後事態は一転してチェルノブイリ原発で事故が発生した事実を認めたのです。

発電所に近いプリピャチから住民避難が始まったのは、事故発生から36時間が過ぎた27日の昼でした。それまで住民には事故についての正確な情報が与えられず、約5万人の人々が、放射能汚染の事実を知らないまま通常の生活を送っていました。それから1週間後の5月2日、原発から30km圏内にあるプリピャチ以外の地域でも避難が開始されました。強制移住者数は数十万人以上と言われています。

被爆者ロシェツニック夫妻

チェルノブイリ原子力発電所で原子炉4炉が爆発して、35年になります。死の灰は旧東欧地域はじめ欧州各地へ飛びました。しかしその日は、ウラジミールとタチアナ・ロシェツニック夫妻の結婚6周

年記念日でした。当時、彼らはまだクリスチャンではありませんでした。ウラジミールは当時の生活を、次のように語っています。「私は若く、元気であり、医師の世話になったことはありませんでした。そして神を必要ともしていませんでしたし、それは私にとって神話でした。」

ウラジミールは爆発直後から2日間、バス運転手として原発事故によって被爆した被災者たちを輸送しました。2日後に彼が自宅に帰ったとき、甲状腺が腫れ、皮膚と目が焼けるように痛みはじめ、激しい頭痛に襲われました。それまで健康を自負していたウラジミールは、一瞬にして健康を失ってしまいました。血液検査の結果、彼も放射線汚染症状が確認されました。ロシェツニック夫妻はバッグを詰めて、その地域から去ることになりました。人間的にみれば、ウラジミールとタチアナはとくに死を迎えていたはずでした。しかし彼らは、人の命は神の御手の内にあることを知りました。



ロシェツニック夫妻

汚染された地域に戻る

医師たちが集中治療室で、被爆した子どもたちに治療を施しているとき、タチアナはひどく心を痛め、子どもたちのために祈り、教会へ連れて行ってあげたいと夫ウラジミールに頼みました。それを機に、彼も教会へ足を踏み入れることになりました。それから礼拝と集会に参加していく中で、ウラジミールは神の存在をはっきりと認識し、自分がどれほど罪深い存在であるか認めました。そして、イエス・キリストを救い主として信じ受け入れました。



原発事故が起こった建物

彼はイエス・キリストを信じ回心した後、しだいに神にお仕えしたいという思いが強くなりました。そして、だれかがチェルノブイリにキリストの福音を伝えなければならないと思いました。1992年、ロシェツニック夫妻はチェルノブイリから約70km離れた町ディメールに引っ越しました。そこはかつて彼の父親が住み神に仕えていた地で、ウラジミールの兄弟ディミトリが教会に仕えていました。ウラジミールは体力が許される範囲で、そこで神にお仕えすることになりました。

神に支えられて

原発事故による悲惨な結果は、現在に至るまで続いています。

昨秋にはコロナに感染し、強力な抗生物質を服用しなければなりません。その後、総合的に健康診断を受けることになりました。その結果、ウラジミールは両方の腎臓の5つの嚢胞が悪い状態であることが判明しました。タチアナも右腎臓にいくつかの腫瘍が見つかり、肝臓の異常、さらに甲状腺肥大が指摘されました。医師団は緊急の手術を勧めましたが、手術成功の保証はないと語りました。それはタチアナの体質は麻酔が効かなく、ほとんどの薬にアレルギー症状を示すからです。(つづく)



ディメールのディミトリ家族

今月からご紹介するストーリーは、以前にも証を分かち合って下さった、ある脱北一家のストーリーです。5人家族の彼らには脱北に至るまでも、ここに掲載し切れないほど多くのエピソードがあります。それら一つ一つのエピソードは、まるで数本の小川の水が一本の大河に流れ出るように、それぞれの小さな奇跡の体験は、壮大な神の愛によるご計画へと繋がっていきます。神の証人たちであるこの一家の証は、今もあらゆるところで、多くの人々に力ある励ましを与えてくれます。

神の証人となった家族(前編)

飢餓地帯に響く希望の産声

その子が生まれた1996年の北朝鮮は、300万人以上が大量餓死した「苦難の行軍」と呼ばれた初めの年でした。その子の両親は、北朝鮮と中国国境の山奥で父親の両親と住んでいました。臨月を迎えた若い母親は、出産のために夫と共に町へ出て、その夫が生まれ育った家で赤ん坊を迎えることにしました。絶えず空腹状態であった母親は、厳しい状況下でお腹の子を守り抜きました。そして、父親が生まれた正にその場所で、元気な男の子が産声をあげ、父親の誕生時に取り上げた同じ産婆が、この息子も取り上げました。赤ん坊はしっかりした体に拳を握りしめたまま、力強くこの世に生を受けました。母親は赤ん坊に乳を飲ませるため、栄養を摂りたくても水しか口にできませんでした。それでも母乳がよく出たおかげで、赤ん坊は元気に育っていきました。祖父はその子を権勢と能力という意味を持つ、クオンヌンと名付けました。クオンヌンの生後1ヶ月に、彼ら3人は再び家族が待つ国境の山奥へと帰っていきました。クオンヌンには2人の愛らしい姉たちがいて、彼女たちは父と母、そして、生まれたばかりの弟の帰りを祖父母と共に楽しみに待っていました。一家にとってこの赤ん坊の誕生は、飢餓地帯の暗い中でまばゆいほどの輝きを放つ希望の光でした。

生きる絆で結ぶ7人家族

新しい家族を迎えた喜びもつかの間、

深刻な食糧難の中、家族7人全員の生命を必死で守りました。木皮を剥ぎ、それを叩いて煮、さらに叩いてから食べ、草もないので、あらゆる植物の根まで煮て食べました。キノコや山の実、そして蛇や蛙は高級なタンパク質源でした。生きるためには何でも食べ、家族全員が一丸となって食糧難に立ち向かいました。3人の子もたちは両親に加え、厳格ではあるものの愛情深い祖父と、日だまりのように温かい祖母からの愛を一身に受けて育ちました。子どもたちは健やかに美しく育ち、彼らはいつも町や学校で模範生となっていました。

祖父は若い頃、北朝鮮で最も高い教育を受け、金日成大学を卒業し、エリート街道を邁進していました。祖母もまた、日本統治時代から学問に励んだ、教養高い女性教師でした。地位も名誉も高い祖父母でしたが、あるとき祖父は、金世襲独裁による反人権的な行動に真っ向から批判しました。その言動が仇となり、祖父は5年間政治犯収容所に送られ、祖父母は北朝鮮社会で反動分子の烙印を押されました。それゆえに、彼らはこの山奥でひっそり暮らすことを選びました。また、祖母は敬虔なキリスト教徒でもあり、いつも熱心に祈りに励んでいました。この家に若くして嫁いできた母は、首領と党に忠誠心を持つ家庭で生まれ育ちました。その忠誠心が災いし、母方の祖父母は餓死を免れることができませんでした。両親をそのようなかたちで亡くし、悲しみを多く抱えた母でしたが、いつも静かな愛と優しさで夫と義父母を支え、3人の子もたちを明るく育てました。

天の故郷へ、夢の世界へ、それぞれの旅立ち

クオンヌンは物心がつく前から、いつも空腹を感じていましたが、大人たちの苦勞を子どもながらに察していました。彼は小さな手に鋤を持って土を耕し、学校に行かない間は山羊を育てて、放牧させていました。また、食事の準備から病床で伏すようになった祖父の下の世話まで、幼い少年は懸命に家族を助けました。クオンヌンが通っていた学校は遠く、暗い森の中を通らなければならない、時には猛獣

に遭遇する危険な通学路でした。それでも彼は、北方から吹く吹雪の日も大雨の日も通い続け、学校は彼に学ぶ喜びを与え続け、志を育んでくれました。しかし、北朝鮮の大量餓死は次第に深刻さを増し、やがては全てが麻痺し、子どもたちは学校さえ自由に行くことができなくなりました。国からの配給も途絶え、国民たちの多くが飢えに苦しみながらも、独裁者の統制と監視のもとで必死に生きていました。そんな国の姿を見て育った多感な少年の心から、国家に対する忠誠心が消え失せることに時間はかかりませんでした。食べることもできず、学校にも行けない子どもたちに、祖父母と両親は夢を通して生きる希望を与えました。韓国や日本、米国など西欧世界のラジオを密かに一家で聴くようになりました。ラジオからの声は、子どもたちの意識の中に自由意志と夢を植え付けました。クオンヌンは北朝鮮では決して聴くことのできない、ラップとヒップホップでさえ口ずさむようになりました。

父はこの国から家族を脱出させようと、水面下で10年の歳月をかけて着々と準備をしていました。父は脱北ルートを探して密かに中国へ数回出入りし、子どもたちをいつでも脱出させることができるよう、水泳や登山で鍛えました。そして、衰弱していった祖父がこの世を去り、祖母もまた旅立って行きました。彼女は最期の時まで、祈りの炎を絶やすことはありませんでした。賛美のいけにえを神に捧げながら、祖母は愛おしい家族たちの手からイエス様に手をとられ、天の父の御もとへと帰っていきました。

(つづく)(名前は全て仮名です)



共に頑張ろうというスローガン

9月号の本記事タイトルが理想郷(前編)となっていたのですが、(後編)の間違いでした。お詫びして訂正させていただきます。

ドイツ

●ボン聖書神学校学監フリードヘルム・ユング教授は、旧ソ連から帰国した約250万人のロシア系ドイツ人教会は、ドイツでお手本とすべき教会と聖徒たちであると語りました。彼らの帰還運動が始まり約50年が経過した現在、彼らの信仰生活から見習うべきことが多くあると語っています。彼らは50年の間に、ドイツ国内に約1千以上のキリスト教会を建て、キリストの福音を語り伝えてきました。その内およそ700教会がバプテスト・ブラザレン教会、約130教会がペンテコステ教会、そして約200教会がルーテル・ブラザレン教会です。中でも約20万人の青年たちは、福音的信仰から良い影響を受けています。彼ら帰還民たちの信仰は、聖書信仰に立ち敬虔な信仰生活を過ごすのが特徴で、彼らは忠実な教会生活を送っています。ユング教授は、「彼らはソ連時代に迫害と苦難を通過し、信仰が磨かれ修練されている」と語っています。

ロシア系ドイツ人たちが祖国に帰還し早くも半世紀が経過した現在、彼らの群れは大きく分けて3つに分類されると、ユング教授は語っています。まず第1は超保守的な群れです。旧ソ連時代の苦難の中から出てきた彼らは、かつての時代の教会体制と信仰姿勢をそのまま保持しています。そこで他の教団やグループと、交流を持とうとしません。彼らが通ってきた過去が過去だけに、そのままの信仰を保持している聖徒たちです。第2の群れは保守的な群れです。彼らもドイツのプロテスタント福音派運動に積極的に参加し、協力することに距離を覚えています。彼らは帰還民による自分たちの群れを作り、教会生活を送っています。そして第3番目の群れは、プログレッシブ(進歩主義)と呼ばれる群れです。彼らは現在のドイツ福音派教会とも協力し、共に教会生活を過ごしている人々です。彼らはワイロー・クリークの群れとも協力し、ドイツの福音派の諸教団とも積極的に交流を持つ人々です。このように帰還ドイツ人たちの教会は、約50年の歴史が経過し、ドイツ教会史に残る足跡を残しつつあります。どうぞ、お祈りください。



F.ユング教授



リーネンのロシア系ドイツ人教会

●ベルリンにあるメシアニック・ジュウ(MJ)の集会「 Beit-Saral-Shalom」の責任者ラドミール・ピックマン師は、このほど第125回ドイツ・アライアンス会議で次のように講演をしました。「イエスをキリストと信じたユダヤ人とクリスチャンの一致こそ、『神のご計画』である」。ピックマン師はウクライナ出身のユダヤ人で、イエスを信じるMJです。ドイツをはじめ欧州各地で大きく活躍中のMJ指導者の一人です。彼はエペソ人への手紙2章から、パウロが教会の一致を説いたように、イエス・キリストを信じる聖徒たちの一致こそ、神のご計画であると力強くメッセージしました。しかし多数のユダヤ人たちはMJの話しに耳をかさず、むしろ拒否している状態です。MJの目標は、ユダヤ人たちが十字架にかけたイエス・キリストこそ、真の贖い主であることを信じることにあります。MJの働きを祈り覚えてください。



講演するW.ピックマン師

フランス

日刊紙「ラ・フィガロ」によれば、フランス人司祭が殺害される事件が起きました。犯人アバイセンガ容疑者はルアンダ出身で、2020年にはナンテスのカトリック教会堂に放火した人物でした。彼は西フランスの人口約4,000人の小村にあるカトリック教会のオリバー・マレー神父(60歳)を殺害しました。神父は8月10日夜、住居に侵入した犯人によって棒打され、その後鋭利な刃物で殺傷されました。アバイセンガ容疑者(40歳)はルアンダでカトリック教徒の両親のもとで、厳しく宗教教育を受けていたと言われます。そして2012年にフランスへ渡ってきました。お祈りください。



魔術儀式を行う魔術師

カメルーン、ガーナ、マラウイ

カトリック教援助活動団体「ミシオ」は、このほど魔術による迫害が世界41カ国で起こっていると発表しました。迷信を信じ人身供養と暴力によって、多数の犠牲者が危険な状態に置かれています。とくにカメルーン、ガーナ、マラウイでは人口の約4分の3は魔術信仰にかかわりがあるとされます。その他パプア・ニューギニア、コンゴ、インド、南アフリカでも魔術信仰が盛んです。歴史家ヴェルナー・チャッシャー氏(ドイツ・アーヘン)は、「ヨーロッパで過去約350年間に起こった魔術による迫害が、これらの国々では約60年間で起こった」と語っています。パプア・ニューギニアでは、原住民は現在も魔術による習慣と儀式から離れられない状態が少なくありません。どうぞ、このためにお祈りください。

ウガンダ

8月15日、イスラム教徒の父親がクリスチャンである実の息子を殺害するという痛ましい事件が発生しました。警察は父親を殺人犯として扱うのではなく、イスラム教を捨てた息子に対する怒りからの行為で、過失致死罪とみなしているようです。事件が起こったのは、ウガンダ・キブク地方パラマのカシム・カオナ村でした。殺害された息子タビルカ・テフィロ兄弟は、2019年にイエス・キリストを信じクリスチャンとなりました。父親は彼を家から追い出したため、彼はカンパラのホテルで働いていました。母親は何度も息子を訪ねて、家に戻り父親と和解しムスリムに改宗するよう勧めていました。

彼は8月1日に実家に戻り、家族会議が開かれることとなっていました。父親は不在でした。父親が8月14日に戻り、息子にイスラム教に改宗するよう説得を始めました。テフィロ兄弟は、自分は18歳を過ぎており、信仰を選択する権利がある大人であると述べました。そして神の恵みによって救われ、キリスト信仰を今も、そして将来も捨てることはないことを証しました。父親は怒りましたが、その時は沈黙していました。翌日、彼はナイフを持って現れ、息子のテフィロ兄弟を農場に連れて行き、体をロープでしばりつけて棒打し、意識を失った息子を吊るし上げて殺害しました。その後、近所の人々がかけつけた頃には、父親はその場に呆然と立っていたそうです。イスラム教から改宗した者は、イスラム法規に従い恩赦はない、と述べています。カンパラの教会の牧師は、この事件を殺人事件として扱うよう警察に訴えました。どうぞ、お祈りください。

ハイチ

カリブ海の国ハイチの南西部で、8月14日にマグニチュード7.2の地震が発生しました。これまでの死者は2千人以上のほり、1万人以上が負傷しています。被災地では激しい雨が降り、熱帯低気圧にともなう激しい雨や強い風が、地震で住む家を失った人たちに追い打ちをかけています。ハイチでは7月7日未明、モイーズ大統領の私邸に武装した一団が押し入り、モイーズ夫妻に銃弾を浴びせ、大統領は死亡しました。マルティヌ夫人は生き延びましたが、治安が非常に悪い国です。今回の大地震は非常事態宣言が発令された矢先のことでした。ハイチ人口約1千100万人の約3分の2は貧困層で、社会の不安定さが続いている国です。今回の大地震に対して、米国、ドイツ、イタリア等の国々から救援の手が届きつつあります。米国の救援団体「サマリタンズ・パース」、ドイツの支援団体「マルテザ・インターナショナル」が活発な活動をしています。ハイチの多くの家屋は簡単に建てられた石造建築でしたが、砂上の楼閣のように無残にも崩壊してしまいました。現在、生活の最低必需品、緊急医薬品が求められています。ユニセフ(国連児童基金)は、この地震で、子ども54万人を含む120万人が被災したと発表し、支援を呼びかけています。なおハイチ国の人々の多くが名前だけの教会員(プロテスタント教徒52%、カトリック教徒35%)で、オカルト宗教のブードウ教儀式的の影響を受けています。2003年、ハイチではブードウ教は公認宗教となっています。どうぞ、このハイチ国と住民のためお祈りください。



地震直後の被災現場

米国

カロリーネ・カンパベル女史(28歳)は長年ダウン症を患っています。しかしながら、彼女は2012年1月から聖書全巻を手書きで写し書きする作業を始めました。それは父ケニー・カンパベル氏の勧めによるものでしたが、約9年の年月を要して約78万2千文字を無事に書き写すことに成功しました。彼女がヨハネ黙示録の最後の文字を書き写したのは、今年6月6日でした。合わせて43フォルダとなり、1万493ページの力作となりました。キリスト教雑誌「クリスチャニティー・トゥデイ」のイ

ンタビューに、彼女は「人々が聖書を知り、みことばを愛することに刺激を受けるように願う。」と答えています。カロリーネ女史自身、この作業を終えることができたことを、大変喜んでいません。このことを知ったある大学生は、彼女がどのようにして聖書全体を手書きで写し書くようになったか彼女に手紙を送り、健常者にも関心を与えています。彼女が使用した聖書は「ニュー・アメリカン・スタンダード・バイブル1973年版」でした。

彼女の両親であるケニー・ジェニファー・カンパベル夫妻は、「カロリーネにはダウン症という持病がありますが、境界線を切る必要は全くない」と考えました。はじめは果たして持病をもちつつ、この作業を続けることは可能かと案じましたが、彼女には人が傷ついた時に感じる驚くべき才能があることが分かりました。カロリーネは死の床にあった家族に、詩篇23篇を書き送り大変感謝されたことがありました。両親は、神が障害者を通してこのような尊い働きをされたことを知り、教会の人々とともに力を受けたと語ります。ケニー・カンパベル氏、「人は肯定的なことより否定的なことを多く考えるものですが、私たちは神がどのような賜物を与えてくださったかを知ることができると語っています。」と語っています。



カロリーネ・カンパベル女史

マリ共和国

アフリカ西部のマリで6月7日、暫定政府の大統領にアシミ・ゴイタ大佐が就任しました。ゴイタ氏は昨年8月にクーデターを主導し、同年10月に発足した暫定政府の副大統領でした。しかし今年5月25日にバ・ヌダウ暫定大統領とモクトル・ウアンヌ暫定首相を拘束し解任し、自らが大統領となりました。そのマリにおいて、2017年以来カトリック教フランスコ派でコロンビア出身のグロリア・アルゴチ修道女が誘拐されました。イタリアの「キルヘ・イン・ノート」は、このほど彼女が手書きの手紙を兄弟に送ってきたと発表しました。手紙には、「皆さんに心からの挨拶を贈ります。愛する神が皆さんを祝福し健康をお守りくださいますように。私は誘拐されて4年になり、この度別の誘拐グループに誘拐されました。」と書いてありました。別の誘拐グループとはGSIMという名称で、イスラム教過激派組織アルカイダと関係を持ち、ジハード(聖戦)を主張しています。どうぞ、お祈りください。

ミッション・宣教の声 *The Voice of Mission*

〒541-0041 大阪市中央区北浜 2-3-10 V I P 関西センター 5F
TEL:06-6226-1334 FAX:06-6226-1336
E-mail: senkyo@vomj.jp http://vomj.jp/

発行人 黒田禎一郎
年間購読料 ¥2,500(送料込)

郵便振替口座 00940-3-301623
銀行口座 三菱UFJ銀行 堺東支店(店番205)
普通口座 3623132「ミッション宣教の声」

The Voice of Mission
MUFG Bank, Ltd. Sakaihigashi Branch
Bank account No.3623132 SWIFT CODE : BOTKJPJT
Bank Address : 59-2 Mikunigaoka-Miyukidoori, Sakai-ku,
Sakai-shi, Osaka-fu 590-0028 JAPAN TEL:81-72-221-3041



■線状降水帯による被害が各地で発生し、自然災害の恐ろしさを改めて痛感させられました。被災地の皆様には心からお見舞いを申し上げます。

■ハイチの大地震、ミャンマーの軍による内乱、それにアフガニスタン情勢。どれも心痛むニュースばかりですが、困難の中にある方々を祈り覚え救援しましょう。

■今号の海外邦人宣教レポートは、パリからです。コロナ禍で活躍中の主の働き人を覚えお祈り願います。皆様のお祈りとご支援に感謝します。